

□書 評□

「大腸疾患アトラス」

長 廻 紘 著
竹 本 忠 良

京都府立医科大学教授

川 井 啓 市

この「大腸疾患アトラス」はそろそろ出版されそうな時期だと思っていたら、案の定出版されたといった感じである。著者名も長廻・竹本両氏とあり、私には、なるほど当然だろうと感じとられたし、またそう思われる読者も多いであろう。

それほど長廻氏の仕事はユニークで、若さの力でグイグイと迫力をもってせまるのを幾度かの学会で、また講演会でみていたからである。序文にも記載されているように、Bauhin 弁の観察は日本のみならず、外国の研究者にも等しく、内視鏡の持つ応用範囲の広さに改めて驚嘆させられたものである。

このような仕事は、東京女子医大消化器病センターという、新しいシステムと、中山・近藤・竹本教授という良き指導者に恵まれて初めて花が咲いたものであろうが、豊富な資料を基礎に伸び伸びと書かれている。

大綱は大腸の診断法、ことに内視鏡の位置づけや、各論的に症例として正常・潰瘍性大腸炎、Crohn 病、腸結核、放射線直腸炎、感染性腸炎憩室炎、ポリープ、癌と要領よく展開されている。好感のもてることはその内容が文献の紹介・羅列に終らず、常に著者の目で批判しながらみられており、著者なりの「あく」が前面にでていることである。

その意味では、本書をありきたりの教科書と考えるのではなく、現在の時点で、著者に消化された総合的な解説書と理解されるべきであろう。

非常に豊富な内視鏡のフィルムには、シェーマを付して説明を完全にし、また美しいX線像、切除標本、

病理組織学的所見の配列は、チームプレーの結果でもあろうが、初心者にもよく理解できようし、診断のパズルの楽しさを与えてくれる。Post graduate の教育材料としてのみならず、広範な内容にふれているだけに専門の方も含め、消化器病学に関心のあるすべての医師に奨め得ることを確信している。

消化器（消化管）病学が、上部消化管のみに専門化されているとか、内視鏡またはX線診断のみに専門化されているとか、診断のみに専門化されている時期は終り、今や全体の中での部分としての見直しや、総合に関心のもたれている時である。

聴くところによると、著者の一人長廻氏は現在、東大の病理学教室で研究中とか、研究者にとって必然の過程でもあろうが、不断の研讀を続けられている著者に敬意を表する。

¥ 13,000 医学書院刊